

今から 200 年ほど前に、各地を歩いて、一般の人に星や天文を教えた人がいました。朝野北水です。江戸時代、旅をしながら学問を教える人は、算数（日本独自の算数で、「和算」と呼ばれた）の分野では何人かいましたが、星や天文の分野では朝野北水だけでした。

北水は現在の東京に住み、福島県、茨城県、山梨県、愛知県、岐阜県、石川県などに出かけ、その土地の有力な農民や侍など、多くの人に星の話をしました。特に長野県では各地を細かく訪れたようです。北水の話聞いた人は、全国で数万人にもなると言われています。富山県には 1808 年に訪れました。

朝野北水が教えたことは、星座や惑星の見つけ方、日食や月食の起こる原理、暦の計算方法などです。模型や大きな説明図を使用して、独自の方法で解説したことが特徴です。星座の見つけ方を教える時は、星座を和紙に写し、本にしたものを使っていました。最後には長さ 8m にも達する大きな星の図を広げて説明しました。当時としては迫力満点だったと思われます。その本や巨大な星の図が全国各地に残っています。

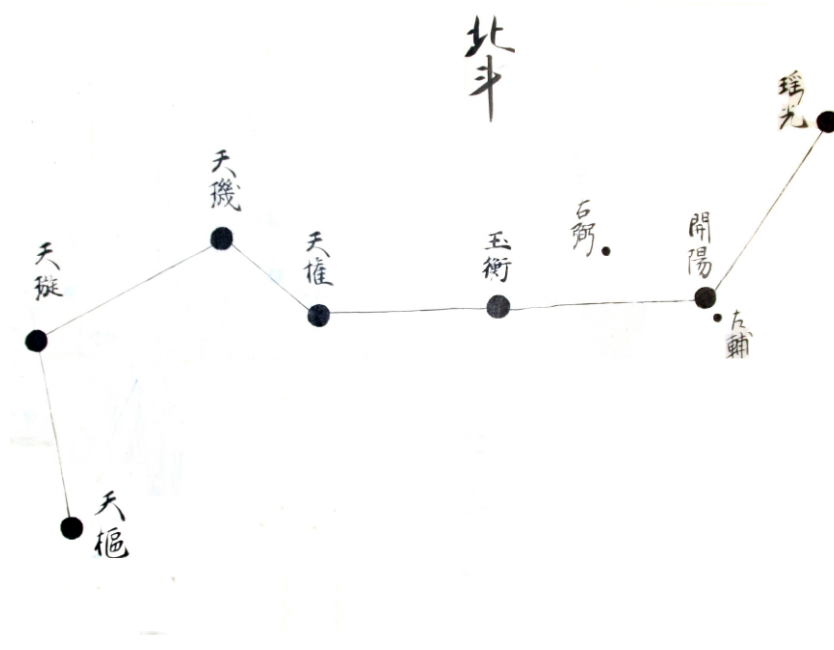
北水の惑星の見つけ方は現在でも通用します。例えば、夕方の金星の見え方の説明です。

「最初は高さ 7~8 度のところより見え始め、それより、だんだん 130 日かけて高さが高くなり、最も高く見える期間は 60 日になる。その後は 50 日かけて高さが低くなり、太陽と同一方向になって見えなくなる。しかし、18、19 日経つと明け方に見え始める」

これは夕方の金星の動きをよく表しています。他の惑星はその時にどの星座に見えるかということで、説明しています。

暦の計算方法は初心者向けにつくられたので、簡易なものでした。そのため、当時の富山藩の本には、「北水は天文のことは詳しくない。」と書かれていました。当時は石黒信由、西村太冲という最先端の天文学を理解している人が富山にいたので、そのような評価になったと思われます。当時の富山県の学問レベルが高かったことを示していますね。

(渡辺誠)



北斗七星の図

北水が使用した星の図（筆者所蔵）